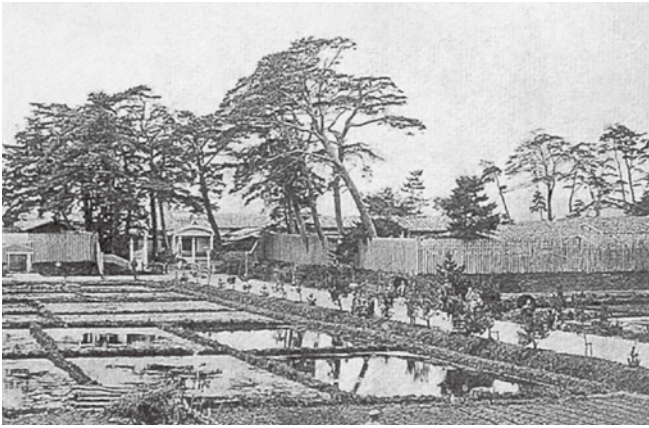


## 県都「誕生」への道のり

【問合せ】  
市史編さん室 ☎ 017-732-5271

青森町は、藩政時代、今から340年ほど前に誕生した町で、湊を町の中心に据え、農業に従事しない「町人」層による町づくりが構想されました。実際、青森町には弘前のような武家屋敷はありません。



【写真①】御仮屋に置かれた県庁（青森県史編さん資料）

ですから、明治4年（1871）に突然「県庁」という大きな行政組織がこの町にやってくることは、藩政時代の町のあり方に対して大変革がなされたこととなります。

ただ、県庁が移転してくる少し前から、青森町にはこれまでになかった変化がみられるようになってきます。

今回は、箱館戦争が終結した後、明治2年の後半期から県庁移転に至る道のりをたどってみることにしましょう。

### 御仮屋の改築

明治2年11月末、弘前から工事作業のための人々がやってきます。弘前藩の出先機関で、藩主の宿泊所として使われていた御仮屋（現青森県庁）を増築するための工事が始まりました。そして、3月から9月までここに藩主が滞在し、家臣たちも一千軒の規模で青森町にやってくることになるだろうと予想されました。

さらに、藩主が半年ほどでも青森に滞在するようになると、青森の町も賑わうだろうと人々に期待されました。工事は翌年まで続き、外堀も整備され二重になったようです。写真①は、御仮屋を使って開庁した青森県庁ですが、藩政時代そのままのものではなく、こうした改築を経た姿であったようです。

### 道路や町並みの整備

さらに、青森町の振興策として、新城村から青森町へと結ぶ道路の開削が企画されます（石神野新道）。これらで新城方面からの物資は油川村を経由して青森に運ばれてきましたが、この道路によって新城方面からの物資が直接青森に入ってくることになり、青森町での物価の安定が期待されました。また、沿道には人家が少なかつたため、新しい村の開発も同時に計画されました。この時に開発され成立したのが江渡村で、後に石神村と合併し「石江村」となります。

このほかにも、衰退していた塩町（写真②）や、堤川周辺にも手がつけられました。特に、堤川の東側では、青森町に編入するために茶屋町村の一部を見分し、ここに料理屋や遊女屋などを建設することが検討されました。さらに、新しい町立てを行って、原別村までを青森町から「町続き」にしよ



【写真②】明治初年の塩町（『目で見る青森の歴史』）

うという、壮大な計画が立てられます。また、浜町にはいくつかの役所も置かれ、ちよつとした官庁街のようになります。

たとえば、かつての町奉行所（ワシントンホテル北側）には民事局が置かれ、中浜町の湊番所（さんふり横丁の西側）には財務一般を扱う会計局、さらには、藩と領内の商人とが出資して成立した青森商社もこの近くにありました。ただ、青森商社以外は場所が一定せず、青森町の人々は戸惑っていたようです。そうはいっても、一方では何かが変わり始めた、人々は感じ取っていたことでしょう。

